

9 文章理解

註: この節の内容は、阿部ら (1994) 「人間の言語情報処理」サイエンス社、に基づく

- 人間の言語活動は一般に、単語や文をこえた大きな言語表現の単位、言語学では談話 (discourse) や文章 (text) で行われる (以降、「文章」を用いる)
- 文章は単なる文の羅列ではなく、全体として「首尾一貫したまとまりのある」文の集まり

例: (ランダムに一文ずついろいろな本から引用)

(50) 1. アパートの玄関に入った。

2. 蛍光灯が階段をうす明るく照らし出していた。

3. 会長は「今年は同地区の交通事故死亡者はまだゼロ。これが少しでも役立ってくれれば。」と話していた。

4. ライオンもじっと探検家を見つめたまま、しばらく動かなかった。

5. そして、足を引きずるようにして食卓についた。

6. それで彼は水着姿になった。

7. このマスコット作りもそのひとつ。

- 問題: 文章を「単なる文の羅列」とは区別している特徴とはどのようなものか、また文章を理解する人間の認知過程とはどのようなものか
- 問題の具体化
 - － 文章を読むという行為の目的とはどのようなものか
 - － 文章を理解するとは、具体的に「何を」理解しているのか
 - － 文章を「どのように」理解しているのか
- 「文章をどのように理解するか」という問題の細分化
 - － 理解過程において、どのような知識がどのように利用されるか
 - － 文脈とはどのようなものか、それがどのように利用されるか
 - － どのような推論が行われ、どのように利用されるか
 - － 文章の意味の表現はどのように作られ、どのように記憶されるか

9.1 文章を読む目的と効果

- 文章のジャンル: 物語 (narrative text)、説明 (expository text)、伝記、記録、詩、脚本、記事、手引書、...
- ジャンルにより読み手の理解過程や、読むことの意味 (意図, intention)、その目的によって得られる効果 (effect) も異なる可能性がある
- 基本的に目的・効果は、知識の獲得と感興 (興味/面白み等の感情) の喚起・獲得の2つ
- 読み手の目的や関心が文章理解に重要な要素—読みの広さや深さ、効果は、読み手の経験や知識だけではなく目的や関心にも影響される

9.2 文章の『何』を理解するか—読み手が解決すべき問題

文章理解の心的過程において人間が何を処理し、その結果何を得るか—具体例で考察

(51) 物語文章「おむすび ころりん」(「小学国語1年」より)

おじいさんが、おむすびを落としてしまいました。おむすびは、ころころころがって、すつとんと、穴に落ちました。穴から歌が聞こえてきました。

「おむすび ころりん すつとんとん」

おじいさんは、うれしくなって、おむすびをみんな穴に落としました。しまい、おじいさんも、すつとんとんと、穴の中に落ちました。

「おじいさん、お餅をついてあげましょう。」

ねずみたちは、またすつとんとんと歌いながら、お餅をついてくれました。

ねずみがおみやげをくれました。

「よっこらしよ。」

うちへ帰ってみると、中には小判がいっぱい入っていました。

(52) 説明文「にているところ」(「小学国語1年」より)

自動車と自転車はどんなところが似ていますか。どちらも乗り物です。どちらにも車がついています。

かぼちゃときゅうりはどんなところが似ていますか。どちらも野菜です。どちらにも種があります。

文章理解における処理のレベル

- 単語レベルの問題: 例. 「おじいさん」の意味、「た」の意味

- 文レベルの問題: 例. (51)の「おじいさんがおむすびを落としました」の意味、(52)の第1段落の「どちら」が指すもの
- 事象や状態の間の関係の問題: 例. (51)の「おじいさんがおむすびを落とすこと」と「おむすびが転がること」との関係、(51)の「うれしくなること」と「(残りの)おむすびをみんな落とすこと」との関係
- 文章全体の意味の理解: (51)で述べられているできごとの関係、(52)において、2つのものが似ていることの基準はどのようなものか

単語や文のレベルの処理に基づいた「文章の理解に基本的な処理」として以下が重要

1. 照応関係 (anaphoric relation) の理解: 文脈中の要素を指示するものとして使われる表現 (例: 代名詞、代用表現、省略) が、実際に何を指示しているのか
2. 接続関係 (coherence relation) の理解: 文脈中で言及されている事象や状態の間の関係の理解

9.3 文章をどのように理解するか

- 増進的な処理過程のモデル:

0. 読み手は何らかの知識をもっていると仮定

1. 新たな文を読み、その意味表現を生成する (曖昧さがある場合、この時点では曖昧さ解消を行わない)
2. その意味表現と読み手が持っている知識とを融合する—新たな文における照応やその文が記述する事象と文脈で記述された事象との接続関係が、無矛盾かつ何らかの基準で結びつきが最大になるような解釈を行う (曖昧な文の解釈を決定し、照応の指示対象を同定し、事象間の関係の推定を行う)。必要ならば (特に矛盾が生じた場合)、それまでの知識 (特にそれまでの文章の解釈) の修正を行う
3. 融合された結果を、新たな「知識」として1.へ。

9.4 文章理解における推論と知識

文章理解における推論: 文章を理解するために、明示的には表現されていない情報を、文章に明示的に表現された情報に基づいて、文脈情報や既有知識を利用して探したり導出したりする

- 動詞が記述する事象と格についての知識と推論

(53) 太郎は花子に本をあげた。

「あげる」という行為に関わる事物(太郎、花子、本)とその行為との関係(格:動作者、受益者、対象)、この行為の結果としての所有権の移動(誰から誰へ何の所有権が移動するか)

(54) 花子が欲しがっていた本を太郎はネットでみつけた。さっそく買って花子にあげた。

「あげる」という行為に関わる事物が3つ必要であること(この必要な要素を必須要素という)と、「さっそく買って花子にあげた」では明示的に述べられている要素が1つしかないことから、残る必須要素の探索が行われる(「さっそく買って」では2つの必須要素が明示的に述べられていないので、同様に探索が行われる)

(55) 太郎は本を買った。値段は1,000円だった。

2文とも必須要素はすべて明示的に述べられているが、この2つが文章として『意味的に関係付けられる』ためには、この2文の間の意味的なつながりの推論が必要。ここでは「値段」が何の値段かを推論することで達成される—「橋渡し推論(bridging)」

- 文章における事象間の関係の推論(次節で述べる)
- より大きな背景知識: スクリプト

(56) 太郎はなんわ食堂に行った。チキン定食を頼んだ。予想外にボリュームがあつて、おなかいっぱいになった。幸せな気分であつた。

この文章の解釈には「食堂」がどのようなものであるかという知識が必要—その知識のもとで、食堂とチキン定食との関係、「太郎が定食を頼んだ相手」がどのような人か、チキン定食を太郎はどうしたか、なぜおなかいっぱいになったのか、などの説明が可能となる—さらにここで明示されていない事柄(太郎がテーブルについた、太郎はお金を払った、など)についての推論も可能となる

10 文章の理解過程のモデル化

文章理解の過程を対象としたときに問題となる関係、すなわち文章の照応関係と事象関係について述べる

10.1 文章における意味的なつながり

文章内の意味的なつながりの研究はいろいろな研究者によってなされており、それぞれ違う用語が使われている

- 有名なものの例: Haliday & Hasan (1976)の「結束性」(cohesion)の分類
 1. 指示(reference): 日本語では、代名詞や「こそあ(ど)」言葉

(57) どじょうは水草の茎をくちぎってもってきて、それにどんぐりを載せました

2. 代用 (substitution): 文章中の構成要素をそれを置き換えた言語表現との意味的な関係。英語では one, same, so など、日本語では「の」「そう」など

(58) 太郎は大小2つのボールをに持っていた。大きいのは赤色、小さいのは青色だった。

3. 省略 (ellipsis)

日本語では英語に比べると必須要素の省略が多く見られる:

(59) アゲハチョウが蜜柑の木に飛んできました。時々おなかの先をまげて、葉に何かをつけています。

次は英語における省略の例:

(60) Wise men talk because they have something to say; fools, because they have to say something.

省略が可能なのは、それに先行する文脈が「省略を可能にする環境を与えている」からである。読み手はこの認識により、ほとんど意識することなく省略を含む文を理解している(ことが多い)。

4. 接続 (conjunction)

複文においては節と節、一般に文と文の間の意味的なつながりを明示するために、接続詞など(日本語では接続助詞も含む)がある:

(61) 朝顔の花によく似た花を見ました。しかし、朝顔と違ってその花は夕方咲いていました。

接続詞は、前の文から予想される事柄と後ろの文で記述される事柄の関係性を明確にする(この例では予想とは異なることを強調)ために用いられる。ただ「関係を明確にする」ことは話者の意図であって、実際にその関係が成り立っているかどうかは、その2つの文で記述される事柄についての知識によって検証/裏付けが行われるべきものである。

5. 語彙的な結束関係 (lexical cohesion)

例文(59)における「アゲハチョウ」と「おなか」、「蜜柑の木」と「葉」というごの間には、その指示対象の間に『全体と部分』という関係がある。このような関係を元にした文章間のつながり。

11 問題

以下の文を読み、質問に答えよ。ただし、自分がそれらの質問に答えるときに行っている処理過程かを観察(内省)し、(1)どのような情報に基づいて、(2)どのような処理/推論によって(3)どのような答えが導かれたのか、を答えよ。

後一時間でマニラに着こうという時、どうしたことから、急に、エンジンから白い煙が吹き出しました。これを発見した機長の鈴木さんは、はっとしました。もしも火でも吹こうものなら、飛行機は、爆発してしまいます。下は、広々と広がる太平洋です。そうしたら、五十人の乗客の命はどうなるでしょう。鈴木さんは、急いで、スチュワーデスの田中さん呼びました。そしていざという時の用意をするように命じました。田中さんの顔がひきしまりました。

「お客様にお知らせするんですか。」

「いや、なんとか、このまま飛んでみる。お客様には知らせない方がいい。」

田中さんは操縦室を出ると、にっこり微笑みながら、

「皆さん、これから救命具をつける訓練をいたします。」と言いました。

1. 今、飛行機はどこの上を飛んでいますか？
2. 乗客は何人ですか？
3. 機長は誰ですか？
4. スチュワーデスは誰ですか？
5. 鈴木さんは、何を発見したのですか？
6. 鈴木さんが「はっとした」のはなぜですか？
7. 鈴木さんが、お客に知らせない方がいいと言ったのは、なぜだと思いますか？
8. 田中さんが、飛行機が危ないことをお客に知らせずに、いざという時の用意をさせたことばはどれですか？